3B

スリー・ビー

別句通〈bekkutooru〉

「３Ｂ（スリービー）」シナリオ

　　「３Ｂ(スリービー)」
〔あらすじ〕
｛アオリ｝
　米国のロックギタリスト・ロビンブルーに才能を見込まれた男子高校生の黒田と板東。ロビンの前座をかけてライブ合戦に挑む。
　次々と撚(よ)られていく数々の出会い。
魂(スピリット)あふれる人生の階(きざはし)を駆け上ろうとする二つの青春！
｛あらすじ｝
　九州から修学旅行で東京に来ていた高校生・黒田翔太はメール仲間の岡本の経営するライブハウスで北海道から来ていた高校生・板東と出会う。
　黒田は投宿中のホテルに一旦戻るも来日中のアメリカ人のベテランロックギタリスト、ロビンブルーを追いかけ、武道館にたどり着く。一方、板東もまた亡き父の影を追って武道館に来ていた。
　武道館のステージで楽器のチューニングを行っていたブルーのスタッフたちはブルー不在のため、偶然迷い込んだ板東にギターの試奏を頼む。板東は日本人離れしたセンスだと絶賛される。ブルーを追って武道館に潜り込んだ黒田も板東のギターを目の当たりにし、無理矢理自分のボーカルを披露してしまう。そして現れたブルーは二人のセンスに感服しきりだった。
　だがプロモート会社の社員でかつてブルーの追っかけをしていた北山恵理が現れ、日本のバンド「ギムネマ」をブルーの前座に据えようとする。ブルーはそれを拒み、いっそ黒田と板東を前座にしたいと申し出る。プロモート会社の社長鈴木は一つの提案をした。それは前座をかけて黒田・板東とギムネマをライブ合戦をさせて人気のあったほうに前座をさせたいというものだった。
　その決戦ライブの日。しかし板東は会場に姿を現さなかった。それは家族を顧みずにロックに走っていった亡き父とロック音楽へのわだかまりがあったからだった。
　しかし板東は岡本の説得でライブへ向かうことを決意した。黒田と板東は度重なるトラブルを超えて勝利を勝ち取った。だが鈴木社長のせいで前座の約束は結局反故にされてしまった。二人は最後にブルーの「アメリカで待っている」というメッセージを受け取る。
〔本文〕
〇東京・神田古書街の裏通り
　　地図片手の黒田翔太(17)と緑(17)と他のクラスメート計４人が歩いている。
緑「翔ちゃん、どこにあんの、その店？」
黒田（少し焦って）「もうすぐ……。こういう町こそ東京しとるだろ」
　　通りはますます狭くなっていく。
　　『ライブハウス・喫茶店エスケープ』の看板。
黒田「おお～あった。ここだ」

緑・仲間「修学旅行来てこんな店入るのー」
　一同目を丸くする。
○『エスケープ』店内
　薄暗く。カウンターとテーブル席３つていど。クリームの曲がかかっている。部屋には大きく型の古い外国オーディオ、壁一面にびっしりアナログＬＰのジャケットやらサイン入りギターや色紙が飾られ、天井まである本棚には譜面がぎっしりと詰まっている。
　黒田だけ嬉々としている。
　緑らは憮然とした表情。
　カウンターにはひげをはやした岡本(45)がいる。
黒田「こんにちは翔太です！レッツさん？」
岡本「おお翔太君か、よく来たな……君のボーカル聞かせてもらったよ。すごい歌唱力だな」
　カウンター席の一つに板東照彦(17)が座っていて店に置いてある譜面やノートなどを読んでいる。その傍らにはギターケースがある。
板東「……」
　黒田が板東に目をやる。
　黒田一行はテーブル席に座る。
黒田「ここのマスターすごい人なんだ。昔アメリカでギター弾いとったんや」
　壁に若かりし頃のギターを弾く岡本の写真や彼の『Ｌｅｔ’ｓ　Ｇｏ』というアナログＬＰが飾られている。
板東「……」
　板東は黒田たちを振り返る。
黒田「わー！しまったー！小銭入れしか持ってきてねー！」
　黒田が大声で叫ぶ。
緑（嬉しそうに）「じゃあ、ホテル戻ろう（ゴハンも）」
　岡本ががっくりする。
黒田「レッツさんごめん。午後は別の予定があるし……せっかく来たのに」
岡本「いいよいいよ。またおいで」
　黒田たちが出て行く。
板東「……」

〇東京のビル街
セリフ「レッツさんって？」
セリフ「ああ、ハンドルネームだよ。おれあの人のＨＰの常連なんだ」
セリフ「ふーん。なんの？」
セリフ「……ロックに決まってんだろ！」
〇ホテル・ロビー
　黒田たちがロビーを歩いている。

緑「もう～あんな汚い店行かないからー」
黒田「はいはい。わかりました」
　長髪のロビン・ブルー(34)が数人のスタッフにと一緒にいる。
黒田（ブルーに気づく）「！」
黒田「メシさー、おれだけ別に食うから」
緑「好きにすれば！もう」
　緑たちが去る。
　黒田が柱の影から見守る。
黒田「あれはたしかにギタリストのロビン・ブルーだ。そうか武道館演るんだったな……くそーおれも観たかった……」
　黒田が上着を脱ぎ、白いＴシャツ姿になる。
黒田「サインしてもらお！そして……」
　黒田が上着ポケットからＭＤを出す。
　ラベルには『Vocal of Shouta!』と書かれてある。
黒田「レコード会社に持ってくつもりだったけど……」
　黒田が振り返るとブルーはエントランスに向かっている。
黒田「待って！ぼくの歌聞いてください！」
　ブルーはタクシーに乗ってしまう。
　黒田はタクシー待ちの列に並ぶ。
　その間にブルーのタクシーは発車。
　黒田は順が来てブルーのタクシーと同じ会社のタクシーに乗る。
黒田「すいません、ここで同じタクシーに乗った長髪の外人がいるんすけど、どこへ向かったかわかりません？友人なんすよ」
　運転手が無線機で話す。
運転手「あー４３５号です。ライトホテルで長髪の外人の方乗せた車連絡下さいー」

〇ブルーを乗せたタクシー・車内
　運転手が横目見ながら、無線で話す。
運転手「……はい、武道館へ向かってます」
　助手席にブルーが乗っている。

〇武道館・全景
　武道館に向かうタクシー。

〇武道館・敷地
　タクシーが一台停まる。
　黒田の顔が描かれる。

セリフ「うわーしまったー！」（小金しか持ってねーんだ……）
〇武道館・敷地
　タクシー運転席に不機嫌な顔の運転手。
　平身低頭する黒田。
黒田「すいません、すぐに実家から振り込ませます」
　走り去るタクシー。
黒田「ふう……。あれ？」
　ギターケースを持った板東が武道館を見上げている。
黒田「あいつ、さっきレッツさんの店にいたやつだ……ロビン、楽屋のほうかなー」
　黒田が武道館の中に入っていく。
板東「ここが武道館か……中も見てみるか」
　板東が武道館の中へ向かう。

〇（板東の回想）同
　母親と手をつないでいる８歳の板東。
母親「お父さんね、アメリカで成功したらここで公演するのが夢なんだって」
　母親の顔を見上げる板東。
　母親は遠い目で武道館の屋根の上についている擬宝珠(ぎぼうし)を見つめている。

〇（本話に戻る）武道館の近くのベンチ
　ブルーが座ってヤキソバを食べている。
ブルー「うめ～」
〇武道館・内部・アリーナ
　アンプなどコンサート用機材が持ち込まれている。
スタッフ「おい、ブルーがいないぞ」（英語で、以下・英）
　板東が一階席に入ってくる。
板東「……ん？」
スタッフ「音合わせしなきゃなんないのに……誰かギターできるのいないか？」（英）
　全員首を横に振る。
　スタッフの一人が迷い込んだ板東に気づく。
スタッフ「ん？あいつギター持ってるのか？」（英）
板東「いけね……」
　板東がそそくさと出て行こうとする。
セリフ（大声）「おーい、そこのギター持った君！」（英）
　板東が振り返る。
板東「え？」
〇同・楽屋

『Robin Blue』の表示。
黒田がドアをノックしている。
黒田「いないの？」

〇同・アリーナ
スタッフと板東が会話している。
板東「いいんですか？ボクで」
スタッフ「エレキギターの音がどう出るか確認したいだけさ」
〇同・廊下
黒田が歩いている。
客席の入り口ドアを開ける。
黒田の驚きの顔。
〇同・アリーナ
板東が光を背にエレキギターを演奏している。
スタッフ一同、呆然と見守っている。
スタッフ「……すごい。こんなにすごい日本人がいたなんて……」（英）
黒田「すげぇ……」
板東が演奏を終えてギターをおろす。スタッフ全員の拍手と口笛。
スタッフ一同「ブラボー！」「グレート！」
スタッフ「すばらしかったよ！ブルーに聞かせてやりたかった！」（英）
板東「ありがとうございます……」（英）
スタッフ「君はボーカルはやんないのか？」（英）
板東「歌はちょっと……」（英）
スタッフ「残念だな。ボーカルもできれば音合わせしたかったのに……」（英）
「待ったー！」
板東とスタッフ一同振り返る。
黒田が歩いてくる。
黒田「お前、スゲェよ……鳥肌立っちゃったぜ。ロビンブルー顔負けだぜ」
スタッフ「なんだ？君は」（英）
黒田「サンキュー。俺、そのギターの彼の友人です。な？」
黒田はウィンクして板東に合図を送る。
板東「あいつ知らない……」
黒田がコケる。（合わせてくれよ～）
黒田「今、ボーカルって言った？必要なら俺にやらせて下さい！」
スタッフ一同沈黙する。
黒田「百聞は一見にしかずだ！」
黒田は上着を脱ぎ、ステージに上がる。

　マイクなしでボブディランの歌を歌い始め、ハーモニカを出して吹く。
スタッフＡ「良く通る声だな……」(英)
スタッフＢ「でも日本人のレベルだよ」(英)
黒田「ダテに歌に自信あるわけじゃねえぜ……地元熊本じゃ、チャンピオンなんよ！」
　『ロックボーカルコンテストｉｎ熊本』の垂れ幕のかかったステージで熱唱する黒田が描かれる。
　歌が終わる。
　スタッフたちのまばらな拍手。
黒田「なんだ、ギターのこいつより少ない」
　少しがっくりする黒田。
　一階席の入口の方から拍手の音が聞こえる。
　ブルーが拍手をしながらステージの方に向かってくる。
スタッフ一同「ブルー！」(英)
スタッフ「どこ行ってたんだ？」(英)
ブルー「悪い悪い。日本の味を堪能してたのさ」(英)
　ウインクするブルー。口元に青ノリがついている。
〇武道館・遠景
　一台のタクシーが武道館に向かって走っている。
セリフ「はい、スケジュールではロビン・ブルーはすでにリハに入ってます」
〇タクシー車内
　後席にはスーツ姿でメガネをかけた恵理(28)が座り手帳片手に携帯で通話している。
恵理「……わかりました。これから本人とお会いします」
　恵理が携帯を切り、窓の外を見つめる。
恵理「ロビン……」
〇武道館・内部・アリーナ
　黒田がブルーに近づく。
黒田「ハロー、ハウドュードゥー。ロ、ロビンブルーさーん、ボクのボーカルＭＤ聞いてくださーい～」
ブルー「やあ、君のボーカル良かったね！音程は必ずしもあってないようだけど」(英)
黒田「え？グッド？サンキューサンキュー」
　黒田がブルーにＭＤを渡そうとするが渡しそびれる。
ブルー（板東に）「そして、君のギターは素晴らしかったぞ！特にスライド奏法、どこで覚えたんだ？」(英)
　板東が会釈する。
板東「親父からです」(英)
スタッフ「ブルーのやつが他人をほめるなんてめったにねえのにな……」(英)
　ブルーがステージに上がり、ギターを構える。

　ブルーがワンフレーズ弾く。
　傍らで見つめる板東。
　ステージのブルーを見上げる黒田。
黒田「ス、スゲェ」
　ブルーが演奏を終える。
　板東と黒田が拍手する。
　ブルーが板東と黒田を見て、親指を自分に向ける。
ブルー「よかったら、オレと演らないか？カモン」(英)
黒田「ス、スッゲー……いいんスか？」
　黒田がブルーと板東のいるステージに上がり込む。
黒田「……へへっ！」
スタッフ（時計を気にしながら）「おい、ブルー、次の予定までそんなに時間がないんだぜ！」(英)
ブルー「ほんのちょっとだよ」(英)
　スタッフがしかめっ面になる。
ブルー（板東に）「いいだろ？」(英)
板東「ま、まあ……」
　少し戸惑う板東。
ブルー（黒田に）「君は歌える英語の曲あるか？」(英)
黒田「え？えーと……その」
板東「『英語で歌える曲はあるか』と聞いている」
　黒田は得意満面で。
黒田「ツェペリンのロックンロールなら！」
ブルー「ＯＫ！（板東に）君はいいか」(英)
　こくりとうなずく板東。
ブルー「行くぜぇ！野郎ども！」(英)
　黒田がマイクを握りしめ、板東、ブルーがそれぞれギターを演奏。
スタッフＡ「……あんな楽しそうなブルー、ひさびさにみたぜ」(英)
スタッフＢ「あのボーカル、発音はひでぇけど、けっこう聴かせてくれるな……」(英)
　演奏が続く。
　スタッフ達が見守っている。
　ブルーよりも黒田と板東がひときわ大きく描かれ演奏している。
　「ギュン！」の音で演奏が終わる。
　スタッフ一同のわれんばかりの拍手。
スタッフ「イッツグレート！」「スーパーワンダフル！」(英)
　黒田と板東がステージを見下ろす。
　客のいない武道館が満場の客席と満場の拍手で描かれる。

「アンコール……」の叫びが描かれる。
ブルーが二人の肩をたたき現実に戻る。
ブルー「素晴らしかったぜボーイズ！……君らは友人どうし？」(英)
黒田と板東は顔を見つめ合う。
板東「『友人どうしか』だって」
黒田「いいえ違います。……でも、さっき会ったよな？」
板東「あ、ああ」
板東はうなづく。
ブルー「？」
セリフ（拍手とともに）「すばらしかったわよ」(英)
振り向くブルーたち。
恵理がステージに向かって歩いてくる。
恵理「こんにちは。今回のプロモーターを務めさせて頂くアドバントの者です」(英)
ブルーがステージを降り恵理に近づく。
ブルー「おお、こんにちは。お会いしたかったですよ～」(英)
ブルーが、恵理になれなれしく握手して、手の甲にキスする。
ステージから黒田と板東がぽかんとした顔で見ている。
恵理「私よ。思い出せない？」(英)
ブルー「……き、君は？」(英)
恵理「そう。私よ」(英)
恵理が自分のかけているメガネをとる。
ブルーが驚きの表情。
ブルー「恵理……！」
恵理は涙で目がうるみ始める。
一同は呆然と見ている。
恵理がブルーの袖を引っ張り連れ出す。
〇同廊下
ブルーと向かい合い恵理が涙ぐむ。
ブルーはバツの悪そうな顔をしている。
恵理「……もう。あれからプッツリ連絡とれなくなるんだもん……」(英)
ブルー「悪かったよ、恵理……。前やってたバンドでゴタゴタもあったし、あわただしくなってさ……」(英)
恵理「なによ……。売れないハリウッド女優と噂の仲にまでなって……」(英)
ブルー「ああ、でも、ジェニファーとは手を切ったさ……」(英)
廊下に至るドアから、黒田たちやスタッフたちが顔を出してブルーと恵理のやりとりを見ている。
スタッフ「グルーピーだったのか？」(英)

黒田「やっぱモテるんだなー。いいなー」
板東（やれやれという感じ）「……」
恵理「ねえ……。これ……」(英)
　恵理が一枚の写真を見せる。
　写真に写っているのは白人の小さな男の子のようである。
ブルー「こ、この子は……！？」(英)
　恵理は横向きで俯いている。
ブルー「もしかして……おれの？！」(英)
　恵理がこくんと頷く。
恵理「あなたの子よ。私が一人で育ててるの……」(英)
　恵理の刺すような目。
　ブルーがうろたえる。
ブルー「そんな、そんな……」(英)
恵理「責任とってくれる……？」(英)
　ブルーが写真をじっと見つめ続け、フッ切ったような優しい表情になる。
ブルー「わかったよ。君が育ててくれてるのなら、逃げるわけにはいかない……」(英)
　恵理はブルーを睨み続けてから、突然写真を取り上げ破り捨てる。
　ブルーが呆気にとられる。
恵理「嘘よ。その写真はデーブ・スペクターの子供時代……」(英)
ブルー「悪いジョークはよせよ！」(英)
恵理「馬鹿……！なんでそんな優しい態度とるの。また好きになっちゃうじゃない……」(英)
ブルー「……ごめん」(英)
　ドアから身を少し出していた黒田やスタッフたちがバランスを崩し、みんな廊下に倒れこんでしまう。
　ブルーと恵理がびっくりして振り向く。
恵理「ま、でも今回はビジネスとしてのつきあいですからね……」(英)
ブルー「あ、ああ。よろしく頼む」(英)
恵理「はっきり言って、チケットの売れ行きは決して良くないわ」(英)
ブルー「まあオレの旬は過ぎたのかな」(英)
恵理「そこで提案なんだけど、前座に日本の新人バンドを使いたいの」(英)
　ブルーの顔色が曇る。
ブルー「オレはそんなの聞いてないぞ」(英)
恵理「でもそのバンドのファンが当日分のチケットを買ってくれるわよ」(英)
ブルー「……！」
　ブルーが顔をしかめる。
恵理「じゃあこれにサインください」(英)
　恵理が英文の契約書の紙をつきつける。

ブルー「……どうせ前座を組むならあの子qa
とやりたい！」（英語）
　ブルーが、倒れ込んで姿勢を直している黒田と板東を指さす。
黒田・板東「！」
恵理「え？なんですって？」(英)
ブルー「彼らの実力はさっきのギグで実証ずみだ……日本人ばなれした勢いと潜在的な実力がある！」(英)
黒田・板東「……！！」
恵理「前座予定の『ギムネマ』は今人気急上昇のビジュアル系なのよ！（黒田・板東をさし）あの子達はまだ子供だし、なんの実績も無いでしょう！」(英)
黒田・板東「……」
ブルー「まったく……日本(ジャパン)は何かというとすぐ実績だのコネだの……」(英)
　黒田が板東の腕を引っ張ってブルーたちに近づく。
黒田「お願いです！ロビンさんの前座やらせてください！」
　黒田は頭を深く下げ、片手で板東の頭を掴んで礼をさせる。
板東（顔をゆがめて）「……！」
黒田「ぜってぇにロビンファンのハートを鷲づかみにしてみます！（板東に）なあ？」
板東「……いや、僕はちょっと……このロビンって方知らないし」
　一同、しんと静まりかえる。
　黒田が板東に向かって喚く。
黒田「なんだとテメェ、アメリカを代表するギタリストのロビンブルー様を知らないってのか？さっきのあの演奏はなんだ！？」
板東「僕、洋楽は父のレコードコレクションの範囲でしか知らないんですよ。だから９０年代以降とか全然知らなくてー」
　恵理は唖然とし、ブルーが咳払いする。
セリフ「面白いじゃないか」
　一同振り返り鈴木(52)が現れる。
恵理「社長！」
　鈴木がブルーに歩み寄り握手する。
鈴木「はじめまして。あなたを招聘したアドバントの社長、鈴木と申します」(英)
（続けて）「ロビン自身が認めるならこの子たちの実力は相当なもんなんだろう」
恵理「え……しかし」
鈴木「やらせてみるのもいいだろう。はっきり言って、ウチの意向で『ギムネマ』を推しているわけでもないんだ。レコード会社に頼まれちまってな……」
黒田「ありがとうございます！」
　黒田が鈴木に頭を深く下げる。
鈴木「ただし条件がある」

黒田「へ？」
黒田「『ギムネマ』と君たちとで、ライブ合戦をやって、勝てたら、前座に選ぼう」
黒田「……！」
ブルー「ああ、それでもＯＫだ」(英)
板東（嫌そうに）「あ、あの……ぼくはー」
　黒田が板東の口を押さえる。
黒田「わかりました！がんばります！」
　恵理は鈴木とブルーの顔を見比べる。
鈴木「ライブ合戦は明日の午前１１時、日比谷公園の野外音楽堂でやってもらう！ちょうどキャンセルで空きがあったもんでな」
黒田「えっえ？明日の午前……ですか」
鈴木（恵理へ）「さっそく『ギムネマ』の事務所に連絡を。ライブ告知の手配もだ！」
恵理「……は、はい！」
ブルー（黒田へ）「というわけだ。がんばってくれ！武道館で本番演ろうぜ！」(英)
黒田「？……？オーッ」
　黒田がガッツポーズをする。
ブルー（板東へ）「君もいいよな？」
板東「……考えさせてください」
　黒田が板東の頭に空手チョップをする。
　痛がる板東。
ブルー「そういえば君たちの名前は？」(英)
板東「あ……板東照彦です……」(英)
　黒田が板東の顔を見る。
黒田「マイネーム、黒田翔太ですッ！」
　恵理が携帯のカメラで二人の顔写真を撮る。
ブルー「じゃ明日な。板東、黒田（英語）。ガンバロウ（日本語）」
黒田「ガンバロウ！」
　ブルーはステージに戻っていく。
黒田「……はあ……でも、なんか、大変なことになってきたような……」
　黒田の携帯が鳴り通話に出る。
黒田「はい。……あ～しまったー！すぐ戻りマース！」
板東「……」
〇東京の空
セリフ「とほほ。ホテルで謹慎してろって」
　黒田の顔が描かれる。

〇東京の街角

　黒田とギターケースを持った板東が歩いている。
黒田「え？板東も修学旅行で北海道から上京したのか？」
板東「うん……でほんとは今日はグループで自由行動なんだけど、教師には内緒で単独行動さ」
黒田「意外と大胆だな……レッツの店には何しに行ってたの？」
板東「僕の父はかつて、あのマスターとアメリカに渡ってバンドやってたんです……」
黒田「！」
板東「で、あの人に預かってもらっていた父のギターをそろそろ引き取ろうと思って、修学旅行のついでに立ち寄ったんです」
黒田「なるほど……それがそのギターかい」
　板東がこくりと頷く。
　きわどい服装の若い女性が通り過ぎる。
　黒田がそれを目で追う。
黒田（少し声を秘めて）「ところでお前さあ……したことある？」
板東「え？」
黒田「Ｈだよ。Ｈ！」
板東「え？……ま、まあ……」
　顔を赤らめる板東。
黒田「な、なぁにぃ～。硬派ぶってるクセにー。俺なんか童貞だぜ。未体験……！相手は同級生の子か？」
板東「いや……ウチ男子校なんで……中学時代の同級生だよ」
黒田「ちくしょー。俺なんか共学なのにな」
板東「でも黒田君かっこいいのに……」
黒田「ダメなんだよな。いいとこまでいっても、いつも進展しないってゆうか。音楽やろうと思ったのはモテると思ったからさ」
　空を見上げる黒田。
　二人の女子高生が道路脇のベンチに腰かけて携帯端末を眺めている。
黒田「ああ、東京の子はかわいいなあ……」
　黒田と板東がそばを通り過ぎる。
女子高生Ａ「ねえねえ明日、日比谷の野音(やおん)で『ギムネマ』がメジャーデビュー前のライブ合戦するんだって」
　黒田と板東がそれを聞いて立ち止まり、女子高生二人の後ろに回り込む。
女子高生Ｂ「ロビン・ブルーの来日公演前座をかけて謎の少年ロックデュオ『バンドウテルヒコとクロダショウタ』と勝負か～」
女子高生Ａ「行く？」
女子高生Ｂ「行こ行こ」
　黒田は拳を握りしめて空を見上げ燃ええる瞳になる。
板東「ねえ、黒田君、それはそうと修学旅行のほうはどうすんのさ。ぼくの学校明日は鎌倉行く

んだよ……」
　黒田が我に返り、顔が真っ青になる。
黒田「そういえばウチは明日帰るんだ」
　黒田の携帯が鳴り、通話する。
　続いて板東の携帯も鳴り通話に出る。
黒田「……はい。えー！？校長先生？」
校長のセリフ［いやー黒田君、インターネット見たよ。明日ライブで歌うんだって？修学旅行のスケジュールは変更させるよ。んで、学校挙げて応援に行くからな。ついでにロビンブルーのサインもらえんかな？］
黒田「は、はあ……がんばります！」
　黒田が携帯を切って板東を見る。
黒田「修学旅行のほうはクリアできたよ」
　板東のほうも携帯を切っている。
板東「いやあ……こっちも……」
　再び板東の携帯が鳴り、通話に出る。
板東「はい……え？岡本さん？」
黒田「！？」
〇『エスケープ』前
〇同・店内
　二つのカップにコーヒーが注がれる。
　カウンター席に黒田と板東が座り、カウンター内に岡本が立っている。
岡本「いやー、ビックリしたよ。さっきインターネットやってたら、君たち二人の名前と写真が載ってたんで……」
黒田「ぼくらも突然のチャンスにびっくりしちゃって……あのロビンブルーに魅入られるとはね……こりゃ全米デビューか？」
　岡本が壁を向いて洗い物をする。
岡本「いい思い出にしなさい」
　黒田と板東は沈黙する。
岡本「日本人が海外めざそうと思っても、そうそううまくはいかないよ。この私みたいにね」
板東「……」
岡本「若い頃、僕は板東君のお父さんと一緒に全米デビューめざして渡米したんだ」
黒田「……」
岡本「でも、どんなにがんばっても芽が出なかった。結局日本に帰ってきたけど」
板東「ーうちの父はそれでも夢を捨てきれず日本とアメリカを往復してました。母やぼくがいるのにもかかわらず……」
岡本「あいつはギタリストとしては腕は超一流だったと思う。でもアメリカには受け入れられなかった……」

板東「最期はロスのアパートで書きかけの譜面に向かったまま薬物中毒で死んでいた」
　板東は悔しそうな顔で目が潤んでいる。
黒田「そうだったんか……板東のギターには親父さんの魂が宿っているのかも……」
板東「ほんとはロックなんて好きじゃないんだ。ぼくの家庭から平和を奪って！」
　黒田が席から立ち上がる。
黒田「そんなこと言うなよ！親父さん悲しむぜ……！」
　岡本が奥からノートを持ってきて板東に示す。
岡本「板東君、これ、生前あいつに捨ててくれって言われてたんだけど……」
　『Ｓｏｎ（息子）』というタイトルの曲の譜面と英語の歌詞が書かれている。
　片隅には鉛筆で『I love you,TERU』とかの走り書きがある。
　涙が落ちてインク書きの音符が滲む。
黒田「明日、この曲やろうぜ！いいだろ？」
　板東が目を拭って振り返る。
板東「え？」
岡本「そうなさい。ぼくも弾かせてもらったけど、いい曲だよ」
板東「……う、うん」
黒田「よし、きまり！」（俺譜面読めねえ）
岡本「ここで練習しな。今日は店閉めるよ」
黒田「レッツさん、サンキュー」
〇東京の空（夜）
〇『エスケープ』店内
　練習をしている黒田と板東が描かれる。
〇日比谷公園
　『次の日』
〇同・野外音楽堂
　中央のステージの壁には『ロビンブルー前座決定戦！』の垂れ幕がでかでかと飾られてある。
　ゴスロリ系のファッションやバンドメンバーに似せたメイクの奇抜なかっこうの少女達や制服を着た高校生、名刺交換をしている大人の黒田らの学校関係者や生徒たちで観客席は満座。
　後ろには『ＬＯＶＥギムネマ』とか『がんばれ黒田君ー大阿蘇高校　ふるさとに錦を飾れ』とか『ファイッ！十勝北工業　はばたけ板東君』などと書かれた幟や垂れ幕が飾られている。
〇同・近くの道路
　『ギムネマ』のロゴが大書された大型トラックが一台停まっている。

〇同・トラック内部。
　はでなメイクとコスチュームのギムネマのメンバー数人とマネージャーがいて（全員男）タバコをふかしている。
メンバーＡ「ふざけんなよっ。いきなりこんなことさせやがって」

メンバーＢ「まったく、メジャーデビュー前に土がついたらどうすんだよ！」
マネージャー「まあ、まあ。みんないつも通りに演奏してくれりゃいいって。ちゃんと手は打つ」
　メンバーがマネージャーの顔を見る。
マネージャー「フフフ……ビジネスと遊びの違いを思い知らせてやるさ……」
　マネージャーは不敵に微笑む。
〇同・控室
　黒田が焦りの表情で携帯をかけている。
黒田「……そう。時間過ぎても板東のやつ来ないんですよ。ヤツの携帯かけても電源切ってるみたいで……」
〇『エスケープ』店内
　岡本が電話で通話している。
岡本「こっちにも来てないよ……心当たりねえ……。うーん……」
　岡本が電話を切る。
岡本（気づく）「……はッ！もしかしたら」
〇武道館・敷地
　板東がギターケースを持ち佇んでいる。
〇同・野外音楽堂
　ステージ上に司会者が現れる。
司会者「これより栄えあるロビンブルー来日公演の前座演奏をかけて二組のアーチストによる競演を行なっていただきます」
　ステージの後ろには鈴木と恵理がいる。
鈴木「けっこう客集まったな」
司会者「一組め、ギムネマー！」
　ゴスロリ少女達の激しい声援。黒田らの高校の生徒達も皆声援を送っている。前に陣取っていた学校関係者はうるさそうな顔で指で耳をふさぐ。
恵理「黒田君たち大丈夫かな……」
　恵理が黒田の控室へ向かう。
司会者「大阿蘇・黒田＆十勝北工・板東ー」
　生徒らの声援や笛太鼓やパフパフが鳴り響く。
学校関係者「がんばれー！」「行けー！」
　ゴスロリ少女たちはシラけてし～ん、となっている。
〇同・控え室
　黒田は顔を青くして冷や汗をかいている。
黒田「まったく……あのコンビ名じゃないと修学旅行の予定変更しないなんて言うし……あ～あ、早く来てくれー。板東」
〇同・ステージ

司会者「それでは、ギムネマの演奏です！」
　大声援に送られてギムネマのメンバーがステージに現れる。
　黒田が席の後ろに出てくる。
メンバーＡ「アーユーオーライッ？ジスイズギムネーマ、ッゴー！」
　演奏前にメンバーＢがＣに耳打ちする。
メンバーＢ「あいつ（黒田）一人しかいねえけど、マネージャーのしわざ？」
メンバーＣ「さあ……」
　耳が割れんばかりの激しい大声援に耳を塞ぐ黒田。
黒田「うるせえな……」
　ギムネマはやかましい演奏とほとんど聞き取れない日本語の歌詞で歌いまくっている。
　その間、激しい声援。
　鈴木は耳に栓をしてステージ最後部の席で居眠りしている。
　ギムネマの演奏が終わる。
　黒田は気が気でない様子。
〇武道館・敷地
　板東が敷地内のベンチに座っている。
セリフ「板東君！」
　板東が立って振り返る。
　岡本が走ってくる。
岡本「やはりここだったか……ここに来たいって言ってたもんな……」
　岡本が板東の肩を掴む。
岡本「野音行きなよ！昨日あんなに練習してたんだからさぁ……」
板東「すいません……ぼく、やっぱりロックはやりたくない……」
　岡本が板東に背を向ける。
岡本「……やりたくないなら何故そのギターを引き取りに来たんだ？」
板東「こ、これは自分で壊したかった……」
岡本「貸して御覧ー」
　岡本がケースからアコースティックギターを出してボディを裏返しにする。
板東「……あ！」
　ボディの裏側に補修の後がある。
岡本「あいつがこれを何度か床に叩きつけて壊そうとした。でもそのたんびに直しちまった」
　板東が唇を噛み、それを見て眉間を八の字に寄せる。
板東「……ぼく、野音(ライブ)へ行ってきます！」
　岡本が黙って頷く。
　板東がギターを持って駆け出す。
〇日比谷野音
　黒田が憔悴しきった表情。

　恵理が黒田のほうに近づく。
恵理「あれ？板東君は」
黒田「まだ来てないすよ…」
　観客席の生徒や学校関係者はざわめいている。
　司会者が来て黒田に話しかける。
司会者「お連れの方はまだ？またギムネマに演奏してもらうよ」
黒田「す、すいませーん」
恵理（困惑）「……」
〇走るタクシー
　渋滞で走行はのろのろ。
〇同車内
　板東が前席シートを掴んでいる。
〇日比谷野音
　演奏を終えたギムネマのメンバーらが肩に手をやって腕を回したりしている。
司会者「えー、黒田＆板東ですが……まだ準備中との事ですので、ここで休憩とさせていただきます」
　生徒らや学校関係者は腕組みをして難しそうな顔をしている。
　帰り出す者も出てくる。
　ギムネマのマネージャーは安堵の表情。
　黒田はあきらめの顔。
黒田「はあ～こうなったら俺だけでやるか」
セリフ「ごめーん。黒田君ー！」
恵理「板東君！」
　恵理と黒田が振り返るとギターケースを抱えた板東が荒い息で走ってくる。
黒田「板東！……お前どこ行ってたんだ？」
板東「……ごめん」
　黒田はにこりと微笑む。
黒田「もう時間が無いぞ！」
　黒田と板東が司会者に駆け寄る。
司会者「時間迫ってるから君たち一曲だよ」
板東「えっ！？」
黒田「……わかりました！行くぞ」
　黒田は頭にタオルを巻き、板東は用意されていたエレキギターを構える。
　二人は互いに顔を合わせて頷きステージに上がる。
　生徒や学校関係者が歓声を上げる。
　ギムネマたちは身を乗り出す。
　マネージャーが顔をしかめる。

黒田「みなさん遅れてすいません。相棒が低血圧で朝に弱いので寝坊してたようです」
　板東がすまなさそうに頭を下げる。
　一部の観客が笑う。
黒田「聞いてください……ギターの板東の親父さんが遺した曲……『Ｓｏｎ(サン)』ー」
　バックのドラマーの演奏を皮切りに、板東がエレキの演奏した瞬間、音が途切れてしまう。
　黒田は板東の方を見る。
　板東はプラグを目で追い顔色が失せる。
板東「き、切れてる！」
　観客席がざわめく。
黒田「……電気が入ってねえのか？」
　ステージの裏のアンプと発電機の配線が切断されている。
　やや離れてギムネマのマネージャーがにたりと笑い、作業着を着て工具箱を持った男に金を渡している。
　ステージに向かって司会者が腕で×(バッテン)のマークを作り、首を横に振る。
　黒田と板東が苦しそうな表情で顔を見合わせる。
　板東は急に肩にかけたエレキギターをおろし、ステージから下がっていく。
　黒田が呆気にとられる。
恵理「……どうしたんだろ？」
　板東が父の形見のギターを抱えてステージに上がってくる。
板東「アンプラグドでいこう……！」
　黒田は深呼吸をして、マイクを捨てる。
黒田「みなさん、ごめんなさーい」
　最前席の者が耳をふさぐ。
黒田「なんかトラブったようなので、アコギと生ボーカルでやります！」
　黒田が大声で悠然と歌う。
　板東は涙にむせびながらギターを弾く。
　つまらなさそうに聞いていたゴスロリ少女達も真剣な眼差しになり、涙すら流す者も出始める。
　演奏が終わり、二人は会釈する。
　割れんばかりの拍手。
　恵理が少し涙ぐみつつ拍手している。鈴木も思わず拍手。
　ギムネマとマネージャーは放心したような表情。
　少し離れた所でブルーが微笑みながら見守っている。
　恵理がブルーに近づく。
恵理「やっぱり来ていたの」(英)
ブルー「当たり前だろ」(英)
恵理「実際はどうなの？あの子たち」(英)

ブルー「……ロックってのは全身音楽なんだ。まず体の全てが楽器でないといけない。つまり、骨格(ボーン)、血(ブラッド)、鼓動(ビート)の３つのＢが重要だ。それらが共鳴共振しあってはじめていい音楽(ミュージック)が生まれる」
恵理「だから体格的にそれらが劣る私たち、とりわけ日本人は言語的にもロックは無理……といつも言ってたわね」
ブルー「でもいつかはそれを超える者たちが出てくるかも知れない……壁は破られるためにあるのだから」
　ブルーがステージのほうを向く。
司会者「えー、素晴らしい演奏でしたけど、もう時間ですのでこれで終了と致します」
　拍手や声援が続く中、黒田と板東は退場しようとする。
観客「アンコール！、アンコール！」
　黒田達が驚いて振り向く。
　光の中に何万人も収容できるようなスタジアムが描かれる。
　黒田と板東の顔が光に照らされ恍惚とした表情になる。
　（フェードアウト）

〇㈱アドバント・ドアの前
セリフ「えー？予定通りギムネマに前座をさせる？」
〇同・内部
　鈴木と恵理、黒田と板東がいる。
黒田「だって決戦後のアンケートでも、ダントツで俺たちのほうが勝ってたのに……」
恵理「そうそう。うちのＨＰでもその結果は公開したんですよ」
　鈴木がくわえたタバコをふかす。
鈴木「黒田君たちが禅譲したってことにしてくれないか？そうすりゃ君たちの株ももっと上がるってもんだ」
恵理「でも、世間が納得してくれるかしら」
黒田「……俺は納得できないっすよ～！」
鈴木「しょせんビジネスなんだよ！こうしとかないと、レコード会社に私の顔が立たないだろうが！」
恵理「……社長、もしかして初めからこうするおつもりだったのですか？」
　鈴木がタバコをもみ消す。
板東「ロビンは……ロビン・ブルーは知ってるのですか？このことは」
鈴木「ロビンは決まったことには全て従う、と言っていたよ。それこそ真のエンタテーナーだよ」
黒田・板東・恵理「！」
　鈴木が黒田、板東の肩に手を置く。
鈴木「黒田君、板東君、君たちは絶対に売れるよ！プロダクションやレコード会社へのプッシュ

はまかせてくれ！」
　恵理と板東は顔を見合わせる。
　黒田が顔をしかめる。
黒田「お断りだね！」
鈴木「わかってないね。この業界に入りたければ、長い物にはいやでも巻かれないと」
黒田「俺たちは日本の芸能界には興味ねえ！アメリカでデビューするからさ！」
板東「！？」
鈴木「ふん。ちょっと外タレに目かけられたからって舞い上がってるのか？そういえばかつてそんなヤツがいたのを知ってるよ……でも最期にゃロスかどっかの安アパートで書きかけの譜面を前にして死んだらしいが……あっはは」
　板東が俯き体を震わせている。
　黒田が眉間にしわを寄せて、両の拳を作っている。
黒田「……てめえ！」
　板東が黒田の腕を抑える。
板東「わかりました。仰せにしたがいます。でも父の遺志は僕が受け継ぎます！！」
鈴木（うろたえて）「父？なんだって？もしかして君……」
　板東が礼をしつつ片手で黒田の頭を下げさせる。
　二人が会社を後にする。

〇都心の路上
　黒田と板東が歩いている。
黒田「残念な結果だったけど、お前に会えてよかった」
板東「ぼくもさ」
セリフ「ねえ、待って！」
　恵理が走ってくる。
恵理「はい、これ」
　恵理が二つの封筒を二人に渡す。
恵理「一応ライブのギャラね……あとこれ、ロビンが個人的にあなたたちに、って」
板東「なんですか？」
恵理「……さあ」
　板東が封筒を空けて恵理と黒田が覗く。中には英文の手紙と英語の会社リストが入っている。
手紙の内容（英文）『黒田に板東　聞いたかもしれないが残念な結果になって申し訳ない。ただこちらもしょせん踊らされる身。わかってほしい。そこで提案がある。君たちで曲を作ってアメリカの音楽出版社やレコード会社に送ってみないか。もしいい感触が得られたなら、アメリカに来い。そのときは私が力になろう。今度は世界相手に演ろうぜ！　ロビン・ブルーより』
黒田「ふーん。でもお前はどうする？」
　板東が沈黙している。

黒田「俺は一人でもアメリカ行こうかな？」
板東「置いてけぼりはないだろう」
　黒田と板東と恵理は笑い合う。（了）